

広島大学 大学教育研究センター 大学論集
第29集 (1998年度) 1999年3月発行：187—204

学生文化の規定要因に関する実証的研究

——15大学・4短大調査から——

武 内 清

目 次

- 1 学生文化調査の意義
- 2 ハビタスと学生文化
- 3 大学授業と学生文化

学生文化の規定要因に関する実証的研究

—15大学・4短大調査から—

武内 清*

1 学生文化調査の意義

(1) 学生文化の諸側面

現在の個々の大学の大学改革，カリキュラム改革をすすめるにあたって，学生や学生文化の実態を考慮することはきわめて重要である。学生文化と遊離した改革案は絵空事に終わる可能性が高い。本稿は，1997年11月—12月に実施した15大学・4短大の大学生調査の結果から，学生文化の実態とその規定要因について明らかにしようとするものである¹⁾。大学改革の一資料となることを願っている。

学生文化は，学生による大学生活に対する意味づけの総体であり，大学生が特定の大学に所属し活動することによって形成する特有の行動パターンである。学生文化にはいくつかの側面がある。第1に，青年文化的側面。大学進学率が上昇し青年の多くが大学へ通うようになると，大学生は特別の存在ではなく，青年の一般的な型となる。商業主義やメディアがターゲットとする青年像の典型が大学生ということも少なくない（武内 1994）。第2に，学生が所属する大学との関係で形成する大学文化的側面がある。個々の大学の伝統，風土，カリキュラム，授業，課外活動が当該の学生に対して影響を与え，その大学独特の学生文化を形成する。カレッジインパクトの研究がこれにあたる。（Astin 1985，丸山 1981，武内 1988）。

第3に，大学内部の社会化効果とは別に外部からのチャーター（charter）効果がある（J.W. Meyer 1972，丸山 1981，竹内 1995）。たとえ大学4年間アルバイトに明け暮れほとんど大学にいかなくても，学生は〇〇大学の学生という周囲の目および自己規定により，その大学の学生文化の特徴を備えて大学を卒業していく。

第4に，対抗文化としての学生文化。学生は大学当局や大学教員に対して常に従属的立場に置かれ，大学の支配の枠組みの中で考え行動せざるを得ない。しかしそれは常に大学に従属しているということではなく，学生は大学から押しつけられる制度的意味を再解釈し無化し変更する実践を常に行なっている。対抗文化的性格ないし「ポピュラーカルチャー」（J. Fiske 1989）的性格をもっている。

このように，学生文化は，青年文化，大学文化，チャーター，対抗文化としての側面を備えているとよいであろう。

以上のように学生文化はさまざまな側面をもつために，実証的に捉えるのがきわめて難しい。そこで，本稿では，単純な分析図式のもとに，限られた視点からの実証的考察を行なう。具体的には，

* 広島大学大学教育研究センター学外研究員／上智大学文学部教授

図1 学生文化と規程要因

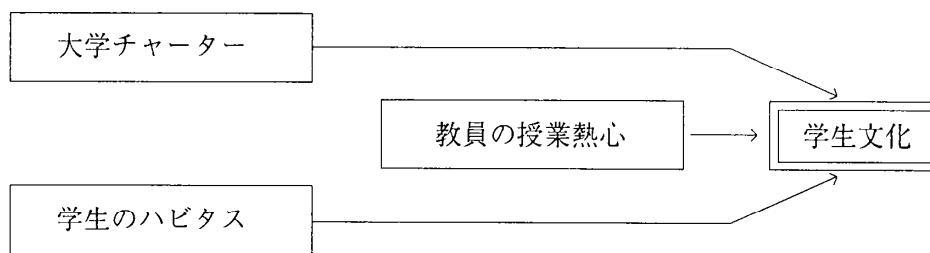


表1 調査対象校のプロフィール

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	
設置主体	国立					私立										公立	私立			
	4年制大学														短期大学					
所在地	東京	関東	関東	東北	九州	東京	関西	東京	東京	東京	東京	九州	中部	関東	関東	関東	関西	関東	関東	
全体	83	67	87	148	147	201	202	34	68	114	96	119	142	122	74	112	126	139	49	
男子	49	35	31	48	61	52	84	11	35	56	67	50	0	0	33	0	0	0	0	
女子	34	32	56	100	86	149	118	23	33	58	29	69	142	122	41	112	126	139	49	

個々の大学の学生文化を従属変数としてとらえ、それらを外から規定する要因（独立変数，媒介変数）についての考察を行なう。その際に検討する規定要因（変数）として、「学生のハビタス」（親の学歴を指標に用いる）と「大学チャーター」（4大か短大か，国立か私立か）および「教員の授業熱心」（学生の評価による）の3つを取り上げる。「学生のハビタス」は学生が外から大学に持ち込む要因であり、「大学チャーター」は大学に対しての外からのレッテルであり、「教員の授業熱心」は大学内部の組織的要因である。これらの関係を図1のように想定し，データで検証する。

(2) 調査対象校の特質

調査対象校は全部で19校である（表1）。その内訳は，4年制大学15校，短期大学4校である。設置別では国公立6校（4年制大学），私立13校（4年制大学9校，短期大学4校）である。地域別では，東京地区6校，東京以外の関東地区7校，中部地区1校，関西地区2校，東北地区1校，九州地区2校である²⁾。

(3) 調査回答者は男619名，女1511名，合計2130名で，その内訳は以下のとおりである。

大学・短大別；4年制大学 80.0%，短期大学 20.0%/性別；男子 29.1%，女子 70.9%/学年；1年生 28.3%，2年生 39.8%，3年生 23.8%，4年生 6.8%，その他 0.8%，不明0.5%/出身高校；男女共学70.7%，男女別学（男子）6.6%，男女別学（女子）22.0%，その他 0.8%/専攻；人文系 24.0%，社会科学系 25.7%，教育系 38.8%，その他 6.6%/現浪；現役 78.6%，1年浪人 15.5%，2年以上浪人 2.4%，その他 2.9%，不明 0.6%/入学形態；一般入試 58.7%，推薦入試 35.5%，帰国子女入試 0.6%，その他 4.5%，不明 0.7%/住居形態；自宅 62.0%，アパート等 31.9%，寮・会館 5.1%，その他 0.9%/父親の学歴；大学卒 41.5%，短大・専門学校

卒 3.7%, 高校卒 38.7%, 中学卒 7.2%, その他 1.1%, わからない 2.8%, 不明 5.0% / 母親の学歴; 大学卒 14.0%, 短大・専門学校卒 20.4%, 高校卒 50.8%, 中学卒 5.6%, その他 1.6%, わからない 2.5%, 不明 5.0%

2 ハビタスと学生文化

(1) 親の学歴 (ハビタス) と大学選択, 学部選択

学生たちの学生生活のなかで一番大きな比重を占めるのは「友人との交友」である (この活動が「大部分」または「かなり」と答えた学生の比率は66.7%)。またつきあう友達は「大学外」(24.0%)より「大学内」(32.6%)が多い。したがって、通う大学にどのような学生が集まっているのかということの影響は大きい。それぞれの大学に入学してくる学生の属性に違いはあるのであろうか。ここでは入学してくる学生のハビタスの違いに注目してみよう。ハビタスとは、家庭や学校で長い時間をかけて形成される行動様式、「身体化された文化」である。それは、出身の社会階層と密接に関連している。竹内 洋 (1990) は、学生の出身のハビタスとキャンパス文化のずれからくる葛藤や悲喜劇を明確に指摘している。㊦の学生が「お嬢さん大学」に入り周囲の「ハイクラス」のサ

表2 親の学歴構成 (大学別)

難易度			地 域	父親学歴				母親学歴			
				中学	高校	短 専 門 学 校	大 学 大 学 院	中学	高校	短 専 門 学 校	大 学 大 学 院
大	国 立	A 5	東 京	5.0	28.8	2.5	<u>63.8</u>	2.5	46.3	22.5	<u>28.8</u>
		B 4	関 東	6.1	31.8	0	57.6	6.1	50.0	18.2	<u>21.2</u>
		C 3	関 東	3.7	33.3	4.9	56.8	3.7	53.1	24.7	17.3
		D 3	東 北	<u>12.0</u>	<u>51.4</u>	4.2	27.5	14.7	55.2	16.1	10.5
		E 3	九 州	7.9	<u>42.9</u>	4.3	37.1	6.4	<u>62.9</u>	14.3	8.6
	私 立	F 5	東 京	2.0	18.8	2.5	<u>75.6</u>	1.0	34.5	27.9	<u>35.5</u>
		G 4	関 西	7.1	<u>44.7</u>	1.0	44.2	5.6	52.5	23.2	13.1
		H 3	東 京	3.1	18.8	6.3	<u>68.8</u>	0	32.3	<u>41.9</u>	<u>22.6</u>
		I 3	東 京	9.0	26.9	3.0	56.7	3.0	55.2	14.9	<u>20.9</u>
		J 3	東 京	7.6	38.1	3.8	46.7	6.6	54.7	18.9	17.9
		K 2	東 京	4.4	<u>42.2</u>	5.6	43.3	2.2	44.4	28.9	18.9
		L 2	九 州	6.4	<u>49.1</u>	5.5	31.8	4.5	55.5	20.0	11.8
		M 3	中 部	5.1	39.7	4.4	47.8	2.9	52.2	28.7	14.7
	N 1	関 東	5.0	<u>41.2</u>	6.7	43.7	2.5	<u>63.9</u>	23.5	5.9	
公	O —	関 東	23.0	31.1	0	26.2	18.0	34.3	8.2	13.1	
短 大	私 立	P 1	関 東	6.6	<u>44.3</u>	6.6	42.5	2.8	<u>60.4</u>	<u>25.5</u>	8.5
		Q	関 西	<u>13.7</u>	<u>53.0</u>	4.3	23.9	11.2	<u>62.1</u>	18.1	5.2
		R 1	関 東	<u>13.8</u>	<u>64.6</u>	3.8	14.6	10.1	<u>69.8</u>	15.5	3.1
		S 1	関 東	4.2	<u>52.1</u>	8.3	27.1	8.3	<u>64.6</u>	18.8	2.1
全 体				7.2	38.7	3.9	43.9	5.9	53.5	21.4	14.8

ブカルチャーについていけない悲哀や、⑤の学生が質実剛健の地方国立大学を選び浮いてしまう悲喜劇が生じるさまを描いている。

今回の我々の調査では、学生の出身階層やハビタスの指標となるものとして、両親の学歴を尋ねている。両親の学歴の文化的側面は、親の行動様式や家庭でのしつけを通して子ども（学生）に内面化や身体化され、ハビタスとして機能している（武内・深谷 1997）。そのハビタスは入学する大学選びや大学生生活の様子に一定の傾向を生み出しているのではないか。まず学生のハビタス（親の学歴）と入学する大学の間の関連をみてみよう。父親と母親の学歴構成を大学別に見たのが表2である。

表2をみると、大学によって親の学歴構成に差があることがわかる。第1に、4年制大学と短期大学で親の学歴構成に大きな差がある。短期大学に比較して4年制大学には親が大学卒あるいは母親の場合は短大卒の子が多く、短期大学には高校卒と中学卒の親が相対的に多い。今回のサンプルでは、子どもが4年制大学へ行く率は父親が4年制大学卒で88.1%，専門学校卒で73.4%，高校卒で73.6%，中学卒で71.9%と差がある。また同じく母親が4年制大学卒で93.3%，短期大学卒で82.3%，高校卒で76.3%，中学卒で72.6%が4年制大学へ行っている。親達は自分より上の学歴を子どもに望む傾向があり子どもの学歴は親より高くなっているが、親の学歴差が子の学歴差に反映している。第2に、同じ4年制大学の学生でも、国立大学と私立大学では親の学歴構成に差がある。一部を除いて国立大学より私立大学に行く学生の親の学歴が高い。これには、私立大学が大都市にあるという地域差も働いている。大都市の親の学歴は地方に比べ高く、私立大学は大都市に偏在している。たとえば東京の私立F大学とH大学の親の学歴はきわめて高い。第3に、同じ私立4年制大学でも、入学難易度の高い大学の方が、親の学歴は高い（私立F大学が1例）。都市の高学歴層の子弟が難関の私立大学に入学している。しかし一方で日本で最難関の国立A大学（入試偏差値は65以上、難易度5）の親の学歴がそれほど高くないことにも注目しておきたい。日本で最難関の入試を突破してくる学生の親の学歴は、都心の私立大学の親の学歴と比べ必ずしも高くない。その他の国立大学も入学偏差値が高い割には、親の学歴が高学歴層に偏ってはいない。国立大学は大都市の私立大学に比べ、教育の機会が階層的にも開かれていると見てよいであろう。

表3 親の学歴と子（学生）の専攻

	父親学歴				母親学歴			
	中 学	高 校	短 大 専門学校	大 学 大学院	中 学	高 校	短 大 専門学校	大 学 大学院
人文科学系	15.8	20.5	28.6	<u>29.6</u>	10.5	21.1	<u>29.3</u>	<u>34.9</u>
社会科学系	23.3	26.0	16.9	27.9	24.6	25.7	26.7	28.1
教 育 系	<u>47.8</u>	<u>44.2</u>	41.6	34.0	<u>52.6</u>	<u>42.5</u>	36.7	29.1
家 政 系	2.1	2.9	6.5	2.8	0.9	3.9	2.3	1.4
そ の 他	11.0	6.4	6.5	5.8	11.4	6.7	4.9	6.2
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	P < 0.01				P < 0.01			

さらに、大学選択だけでなく、学部・学科選択においても、学生のハビタス（親の学歴）が働いていることに注目しておきたい。表3は、親の学歴別に、子（学生）の現在の専攻をみたものである。表3から、社会科学系と家政系は親の学歴（ハビタス）と関連がないが、親が大学・短大卒の高学歴層の子は人文科学系（文学、語学）を専攻する率が高く、親が中学・高校卒の場合は教育系を専攻する率が高いことがわかる。教育系が高くない学歴層と結びついていることは、歴史的に教員層がどのような階層から排出され（旧士族、農民層を主要な供給源とした）、現在の階層的地位がどこに位置しているか（中間層）ということとは無関係ではない。教師や教育系は決して高い位置にはいないのである。このように親や子の文化特性（ハビタス）と大学の専攻の間には、関連があるといえる。

(2) 親の学歴（ハビタス）と子（学生）の大学生活

親の学歴が子（学生）のハビタスの指標となると考えると、それは、子（学生）の大学生活とどのように関連しているのであろうか。大学教育の内容や形式は、ブルジョア階層の文化に近く、労働者階層の文化とは不調和や葛藤をおこす、労働者階層の子弟は大学の授業が自分たちの育ってきた階層の文化とは合わないと感じ、大学の授業からドロップアウトする、という仮説を立てることができる。まず、親の学歴と高校時代の過ごし方との関係を見てみよう。

表4から、高学歴層の子（学生）は、高校時代から受験勉強と読書をよくしていた。高学歴層でない子どもは受験勉強や読書はあまりせず、アルバイトをよくしていたことがわかる。これもハ

表4 親の学歴と高校時代の過ごし方（「かなりした」＋「まあした」）

	父親学歴				母親学歴			
	中	学	高	大	中	学	高	大
	学	校	短	大	中	学	高	大
	専	門	大	大	専	門	大	大
	学	校	学	学	学	校	学	学
	院	院	院	院	院	院	院	院
本を読んだ	36.6	36.2	36.7	<u>37.5</u>	33.6	35.0	37.8	<u>41.9</u> #
受験勉強をした	51.7	53.7	61.6	<u>62.7</u> #	52.1	56.6	57.5	<u>68.9</u> #
アルバイトをした	26.8	26.2	<u>30.4</u>	18.2	<u>28.6</u>	25.3	21.0	15.4#

(# ; P<0.01)

表5 親の学歴と大学の授業観（数字は「とてもそう」＋「ややそう」の割合）

	父親学歴				母親学歴			
	中	学	高	大	中	学	高	大
	学	校	短	大	中	学	高	大
	専	門	大	大	専	門	大	大
	学	校	学	学	学	校	学	学
	院	院	院	院	院	院	院	院
おもしろい授業	51.9	48.6	<u>58.3</u>	55.1	48.8	48.9	56.0	<u>58.9</u> #
幅広い知識	<u>52.9</u>	45.5	46.9	47.6	49.6	45.3	48.8	49.2
専門的知識	67.3	60.4	68.4	61.7	62.7	60.7	<u>66.1</u>	60.2
先生は熱心	<u>45.4</u>	37.9	30.8	40.2	42.4	39.1	42.3	40.1
授業全般に満足	55.4	<u>58.3</u>	48.6	51.6	20.6	25.4	26.6	<u>32.5</u>
授業に80%以上出席	70.6	65.6	<u>74.7</u>	63.5	60.5	65.7	<u>68.4</u>	61.7

(# ; P<0.01)

表6 親の学歴と大学生生活（数字は「大部分」＋「かなり」の割合）

	父親学歴				母親学歴			
	中 学 高 校	短 大	大 学	大 学 院	中 学 高 校	短 大	大 学	大 学 院
学業，勉強	<u>50.7</u>	45.5	38.0	43.6	42.8	46.0	51.6	<u>56.4</u> #
ダブルスクール	2.1	4.2	3.9	<u>5.8</u>	3.6	4.0	4.5	7.8
サークル，部活動	20.6	25.4	26.6	<u>32.5</u> #	19.5	26.9	27.6	<u>37.4</u> #
アルバイト	43.4	45.9	<u>49.4</u>	42.7	<u>49.6</u>	47.3	43.5	35.8 #
趣味	39.3	43.6	<u>50.7</u>	48.6	40.3	45.9	42.5	<u>52.0</u>
友人との交友	59.0	67.9	71.8	68.7	61.0	68.3	70.0	65.2 #
異性との交友	33.4	34.3	<u>41.8</u>	31.9	31.4	33.8	33.4	32.4

(# ; P<0.01)

ビタスの違いを反映していると考えられる。

そこで、次に学生のハビタス（親の学歴）と子（学生）の大学の授業への適応との関係を見てみよう。表5のように親の学歴（＝子のハビタス）と授業への適応との関係はほとんどみられない。ただ唯一母親が4年制大学卒だと、子ども（学生）は大学の授業が「おもしろく」、授業に満足する傾向が高まるのがわかる。つまり「知識階層」（母親4大卒）の母親の生活様式や躰けと大学の授業の内容や形式とは多少親和的であるということが出来る。しかし全体には、親の文化階層と大学の授業との関係はそれほど明確にはないといってよいであろう。

次に表6は、学生が大学生生活の何に比重を置いて生活しているかを、親の学歴別に見たものである。表の数字はそれぞれの活動の比重が「大部分」と「かなり」の割合をプラスした割合を示したものである。これをみると、父親の学歴との関係はサークル活動以外（父親が高学歴層の子弟はサークル、部活動に打ち込んでいる）ではほとんどみられない。それに対して、母親の学歴と子どもの大学生生活には一定の関連がみられる。母親の学歴が高い子ども（学生）は大学生生活において勉強、サークル・部活動、趣味に打ち込む傾向みられ、母親の学歴が低い子はそのような活動は少なく代わりにアルバイトをよくしている。つまり大学の勉学、サークル・部活動は大学卒の母親やその母親の生活様式や躰け（ハビタス）と親和的である。そしてアルバイトにはその逆の関係がみられる。

(3) 大学文化の規定力

では、家庭でつくられる文化（ハビタス）と学生の大学生生活とが関連しているとした時、それぞれの大学の文化はそのような関連の中でどのような働きをするのであろうか。それを検証するために、親の学歴と通う大学と学生生活の3重クロスをみてみよう。ここでは4年制大学か短期大学かおよび国立大学（B大）か私立大学（F大）かという大学の違いに注目しよう。この4大か短大か、国立（B大）か私立（F大）かの違いは、大学イメージの違いからくるチャーター効果と大学内部の社会化効果の両方を含む。

表7から、アルバイトに関して、大学生生活の中のアルバイトの比重は4大と短大で違いはないが、アルバイトの職種に違いがみられることがわかる。どの親の学歴レベルでも4大は塾・家庭教師が

表7 母親の学歴×大学（4大か短大か）×アルバイトの比重、職種、社会意識

	アルバイト比重大 (大部分+かなり)		アルバイト職種				社会意識 (日本はアジアに反省すべき)	
			家庭教師, 塾		サービス関係			
母親の学歴	4大	短大	4大	短大	4大	短大	4大	短大
中学	50.0	48.4	<u>31.0</u>	0	35.7	<u>60.6</u>	<u>48.6</u>	30.3
高校	47.2	47.5	<u>30.4</u>	3.9	40.4	<u>46.5</u>	<u>46.0</u>	34.3
短大, 専門学校	45.1	46.4	<u>32.8</u>	1.2	41.5	<u>45.5</u>	<u>46.6</u>	42.9
大学, 大学院	35.9	35.0	<u>39.4</u>	0	20.1	<u>50.0</u>	<u>53.5</u>	30.0

表8 母親の学歴×大学（4大か短大か）×生活の比重

母親の学歴	学業, 勉強の比重大		サークル, 部活動比重大	
	4大	短大	4大	短大
中学	48.9	27.3	26.0	3.0
高校	51.2	28.9	<u>31.2</u>	12.9
短大, 専門学校	<u>55.4</u>	33.5	<u>32.0</u>	7.8
大学, 大学院	<u>57.2</u>	45.0	<u>38.6</u>	20.0

表9 母親の学歴×大学（F大, B大の比較）×生活の比重

母親の学歴	学業, 勉強の比重大		サークル部活動の比重大		アルバイトの比重大	
	F大	B大	F大	B大	F大	B大
中学	0	50.0	50.0	25.0	100.0	100.0
高校	57.3	39.4	49.2	33.4	63.2	51.5
短大, 専門学校	<u>70.9</u>	33.3	53.7	41.6	43.6	33.3
大学, 大学院	<u>69.5</u>	50.0	<u>48.5</u>	28.6	24.3	<u>50.0</u>
計	<u>64.8</u>	40.9	<u>50.0</u>	32.6	43.6	<u>55.6</u>

多く、短大はサービス業が多い。また社会意識に関しては、親の学歴差より4大か短大かの差の方が大きい。（4大生の方が、「日本がアジアに対して行なったことに反省すべき」が多い）

表8から、大学生生活の重点（比重）に関して、勉強重視とサークル、部活動重視は、表6でみたような親の学歴差もあるが、それ以上に大学差（4大か短大か）が大きいことがわかる。どの学歴レベルでも4大生が勉強とサークルの両方に力を入れ、短大生を引き離している。また表9から、ほぼ入学偏差値の同じ私立大学Fと国立B大学との大学生生活の様子を比較してみると、私立F大学の学生はよく勉強とサークル活動を行いアルバイトの比重は小さい、それに対して国立B大学の学生は勉強とサークル活動にうち込む率は少なくアルバイトの比重が大きい生活を送っている。同じ親の学歴（ハビタス）レベルで比較して上のようなことがいえるということは、親の学歴（ハビタス）が子どもの行動や意識を直接規定する側面は小さく、通う大学の文化の規定力が大きいことがわかる。つまり日本において親の学歴（子のハビタス）の違いは、大学における学生文化の違いを直接生み出すのではなく、大学文化の違いを経由して働いていることを示すものである。また、個々の大学の文化がはっきり存在することを示す証拠でもある。

(4) 大学生のハビタス観

実際学生たちは、自分の出身のハビタスと大学の文化との関係をどのように感じているのであろうか。東京の私立F大学の学生のコメントを掲げおこう。F大学は、東京の都心にあるミッション系の高偏差値の大学である。

質問は「どのような時ハビタス（身体化された文化）を感じるか」というものである。

《・毎日感じています。・F大学に入ってたくさん感じた。・文化的階層の話聞いてまさに私のことだと思った。・東京にきてからハビタスをよく感じる。私には田舎の国立大学の方があっていと確信している。・私はめちゃめちゃビの公立地方出身なのでFにきて皆がお洒落過ぎて困る。やはり自分は国立B大学がお似合いだと思った。・この上品な大学の雰囲気は私のハビタスには合致しないように感じた。・服とかバッグとか普通に買うものが違う。・この人はお金に対する感覚が違うなと感じる人がいる。・お金持ちの家の人は持っているものの値段が違うので驚いた。・まわりの友人に庭にテニスコートのある話を聞かされたとき。・外見でもやはり群を抜いているような雰囲気を漂わせている人がいる。・自分の親を「お父さま」「お母さま」と呼ぶ人に会った時。・その違いは服とかではなく、価値観の違い。・バイトもしないで、お金を使いまくっている人を見てむかついたことがある。・まったく世の中の過酷な部分を知らないお嬢さんが私のまわりには沢山いる。表面的なことしか彼女とは話せない。・クーラーが壊れて大騒ぎしていた友人（我が家は去年まで団扇しかなかった）、親への電話でガチガチの敬語を使っていた友人、コンビニのお弁当を食べられない友人（まずくて食べられないらしい）、東大しか受験させられてもらえない友人（親族こそって東大らしい）、衣類、もちものブランド（私はイトーヨーカドーのワゴン品ばかり）・F大学；きれいめ、お嬢様系、K大学；隣のお姉さん風、庶民風　・帰省して地元の国立大学にもぐったとき雰囲気がまったく違っていった。・地方の国立の子の服装はとてもカジュアルでF大学ではあまり見ないような感じだった。・国立の大学に遊びにいったとき。・F大学に入って皆育ちがよい。たとえば食べるときや歩き方等についてである。高校の友達に会うとほっとする反面Fに染まってしまったのかなと感じる。・高卒や中退の人達が多いバイトの中で話がわからないことがよくあった。・F大学は朴訥のほうに近い。F大学に実際入ってみると地方出身者も多く、なんてことはない。・私は5点だが、得点の高さは「顔立ち」でわかる。・私のスコアとしては5点満点であると思う。実際我が家は特に意識するわけではないが、“低俗”と思われるようなものには関心がなく自然と触れないし私にも別世界のように感じられる。》

このように、学生たちは入学した大学の文化特性と葛藤を起こし、同時に通う大学文化を内面化・身体化しながら、その大学特有の行動様式（文化）を身につけていく。

3 大学授業と学生文化

学生文化の特質は、学生の出身階層や大学チャーターといった外部要因によってのみ規定されてしまうのであろうか。大学内部の組織的特質は、学生文化への規定要因にはならないのか。その点を今回のデータで検証してみよう。大学内部の組織的特質としては、大学の伝統、所在地、規模、

施設設備, 教員学生比率, カリキュラム等が考えられるが, ここでは学生文化に密接に影響すると思われる教育重視の風土に焦点をあてよう。具体的には最近の大学の「教育重視」³⁾, つまり大学教員が授業を重視し熱心に教えることは, 学生たちの生活に何か影響を及ぼしているかの検証である。

(1) 大学教員の「授業熱心」の規定要因

「先生が授業に熱心である」に「とてもそう思う」9.0%, 「ややそう」29.8% (肯定38.8%), 「どちらともいえない」43.8%, 「ややそうでない」13.6%, 「全然そうでない」3.4% (否定17.0%) と答えている。男女別では, 「とてもそう思う」は男子10.1%, 女子8.6%と差がないが, 「ややそう思う」を加えると, 女子の41.7%が「先生が授業に熱心」と感じ, 男子の32.6%を上回っている ($p < 0.01$, 相関係数; -0.115)。しかし, 大学別にみると, 男女差はほとんどない (たとえば国立C大学では, 男子とも29.1%が「先生が授業に熱心である」と感じ, 私立F大学では, 男子45.1%, 女子の46.9%がそう感じている)。

大学別に見ると, 「先生が授業に熱心である」(「とてもそう思う」+「ややそう」)と学生が評価する割合は最高の74.3%から最低の20.9%までさまざまである。

「授業熱心」の割合を, 大学別に示そう。大学名 (設置別, 入学難易度),

O (公-)74.3(%), R (短1) 55.8, A (国大5) 54.2, Q (短1) 51.6, F (私大5) 46.5, I (私大3) 45.6, M (私大3) 44.7, L (私大2) 41.5, N (私大1) 40.8, S (短1) 40.8, P (短1) 37.5, D (国大3) 36.5, H (私大3) 32.4, K (私大2) 30.5, C (国大3) 29.0, G (私大4) 25.4, J (私大3) 22.8, E (国大3) 21.2, B (国大4) 20.9

総じて, 4年制大学より短期大学の学生が「先生が授業に熱心」としている。(肯定の割合; 4年制大学36.8%, 短期大学48.1%, $p < 0.01$, 相関係数0.115)。教員の授業熱心が最高点 (74.3%) の公立O大学は, 社会人の多く通う通信制の大学であり, 学生の勉学熱心さに教員が触発されて熱心に講義していると考えられる。短大とO大学を除けば, 次に高いのは国立A大学 (54.2%) と私立F大学 (46.5%) である。共に偏差値65以上 (難易度5) の大学である。また女子大学 (私立M大学44.7%, 私立N大学40.8%) も高い。小規模校の値も高い (私立J大学45.6%, 私立M大学44.7%, 私立L大学41.5%)。このように, 短大, 社会人大学, 高偏差値大学, 小規模校, 女子大で, 「先生が授業に熱心である」と学生が評価している。逆に「教員が授業に熱心でない」と判定されているのは, 偏差値が中レベルの大規模校である。多くの国立大学や, 大規模な私立大学では, 「教員は授業熱心ではなく」, 学生は伝統的な自由放任状態に置かれている。少なくとも学生はそう評価している。(国立B大学20.9%, 国立E大学21.2%, 私立G大学25.4%, 国立C大学29.0%, 私立K大学30.5%)。

専攻別にみると「先生が授業に熱心である」のは, 順に「人文科学系」(文学, 語学) 47.6%, 「その他」47.5%, 「家政系」42.6%, 「教育系」(教員養成) 36.9%, 「社会科学系」(法, 経済, 商, 社会) 31.8%である ($p < 0.01$)。このように専攻の性格によっても, 教員が授業に熱心になる分野とそうでない分野がある。語学を含む「人文科学系」の教員が熱心で, 法経商社の「社会科学系」の教員が熱心でない。ただし同じ専攻でも教員の授業熱心に大学差もみられる。たとえば同じ「社

会科学系」で、教員の授業熱心は、私立F大学31.7%、私立G大学24.6%と差があり、「教育系」で私立F大学31.3%、国立B大学25.2%と差がある。

以上のように「教員が授業熱心」と学生が感じるのは、多少男女差や専攻差があるものの、大学による差が大きいことがわかる。その大学差は4大か短大か、大学規模、偏差値、女子大か否かによって違っている。また大学の伝統や大学風土によるところも大きいであろう。

(2) 大学教員の「授業熱心」が学生文化に及ぼす影響

この「教員の授業熱心さ」が学生の授業満足度、大学生生活満足度、大学生生活の重点、価値観の変容にいかに関連しているかを次にみてみよう。しかしここで用いている「教員が授業熱心」という評価は、学生による評価であり、教員の自己評価や客観的評価と一致しない場合があることに注意したい。教員がいくら授業熱心でも学生にそれが伝わらない場合もある。

表10からまず、「先生が授業に熱心である」と強く感じている学生ほど、「おもしろい授業がある」「幅広い知識が得られる」「専門的知識が得られる」「少人数、ゼミ形式の授業がある」「授業全般に満足している」と答えていることがわかる。「教員の授業熱心」が、授業への高い評価や高い授業満足度を生み出しているのである。次に、「学科やクラスの友人関係」「先生との関係」「大学全体

表10 「教員の授業熱心」(学生の認識による)が、学生文化に及ぼす影響

授業・大学満足度・生活の重点	先生が授業に熱心である(独立変数)						相関係数
	とてもそう	ややそう	どちらとも いえない	ややそう でない	全然そう でない	有意差	
(従属変数)	(191名)	(639名)	(926名)	(290名)	(72名)		
おもしろい授業がある (とてもそう+ややそう)	<u>79.0</u>	63.6	46.8	32.1	15.3	*	.37
幅広い知識が得られる (とてもそう+ややそう)	<u>71.2</u>	59.4	42.3	28.7	15.3	*	.36
専門的知識が得られる (とてもそう+ややそう)	<u>80.6</u>	74.4	59.8	42.9	25.0	*	.35
少人数、ゼミ形式の授業がある (同上)	<u>74.1</u>	61.7	49.2	35.3	20.8	*	.28
授業全般に満足している (同上)	<u>64.9</u>	42.3	14.3	3.4	0	*	.55
学科やクラスの友人関係 (とても+やや満足)	<u>73.2</u>	71.8	64.7	57.2	48.6	*	.14
先生との関係 (とても+やや満足)	<u>56.8</u>	38.1	21.7	6.4	2.7	*	.38
大学全体の雰囲気 (とても+やや満足)	<u>41.4</u>	41.2	26.7	8.4	9.8	*	.29
今の学部・学科に入ったこと (とても+やや満足)	<u>72.6</u>	68.9	55.0	52.2	29.3	*	.22
今の大学に入ったこと (とても+やや満足)	<u>74.4</u>	63.1	51.1	49.0	25.0	*	.21
学業、勉強 (大部分+かなり)	<u>60.5</u>	54.7	34.7	41.2	20.8	*	.19
サークル、部活動 (大部分+かなり)	32.6	24.2	28.2	<u>34.3</u>	24.0		.00
アルバイト (大部分+かなり)	36.4	43.0	45.3	44.4	<u>58.3</u>	*	.06
趣味 (大部分+かなり)	44.7	44.2	46.4	49.6	<u>56.3</u>	*	.04
友人との交友 (大部分+かなり)	<u>69.6</u>	68.7	67.0	63.8	62.8		.04
異性(恋人)との交際 (大部分+かなり)	<u>37.4</u>	31.1	33.1	34.5	30.5		.00
授業への出席率(80%以上)	<u>75.8</u>	71.5	62.9	57.9	52.8	*	.14
大学に入って価値観が変わった「かなり」	<u>38.9</u>	25.4	23.6	29.7	34.7	*	.04
大学では授業や勉強を中心に生活を送る	<u>49.2</u>	42.8	38.1	37.5	25.4	*	.09

(下線; 最大値, *カイ2乗検定1%水準で有意差あり, $P < 0.01$)

の雰囲気」「今の学部・学科に入ったこと」「今の大学に入ったこと」といった授業とは直接関係のない大学の人間関係や雰囲気に対する満足度についてみてみよう。これらの満足度も「先生が授業に熱心である」と強く感じている学生ほど高くなっている。教員の授業に対する熱意が、クラスや学科そして大学全体の活気や大学の居心地のよさをつくり出し満足度を高めているのであろうか。さらに、大学生生活の重点を聞いた質問とのクロス集計を見ると、「教員が授業熱心」と評価している学生は大学生生活の重点に「学業、勉強」を置き、そうでない学生は「アルバイト」や「趣味」に生活の重点を置く傾向があることがわかる。「教員が授業熱心」と「サークル、部活動」「友人との交友」「異性（恋人）との交際」との関連は見られない。

もちろん、このデータの規定関係を逆に読むこともできる。すなわち学生が何に生活の重点を置くかによって、教員の授業熱心さへの評価も変わってくるという見方である。つまり勉強熱心な学生は授業内容への関心も高くそれゆえ「先生が授業熱心だ」と感じ、一方アルバイトや趣味活動に忙しく授業に欠席しがちで授業に出てもボーとしている学生は、授業が理解できない理由を教師の教え方や熱意の不足（「授業不熱心」）に帰す傾向があるという読みである。いずれにしろ「大学の教員が授業熱心であること」（学生による認識）が「授業の満足度」のみならず、「学科やクラスの友人関係」「大学満足度」「大学生生活の重点」と関連があるということが出来る。

このように教員が授業に熱心である（少なくとも学生にそう感じられる）と、学生は授業に満足し、クラスの友人関係も良好で、大学全体への満足度も高まる。生活も勉学中心となり、大学のサークルにも加入し、大学生生活を楽しむようになる。逆に、教員がなげやりな授業をし学生が教員の熱意を感じられないと、授業に不満を感じ、生活の中心はアルバイトや趣味といった大学外のことに向かい、今の大学に入ったことや今の学部に入ったことにも不満を感じるようになる。上記のデータは、大学の外部要因（ハビタス、チャーター）だけでなく、大学の内部の組織や組織努力が学生文化に影響を与える例としてあげることができるであろう。

(3) 学生の大学授業観

「現在の大学教育やあなたの通っている大学や先生について、感じることや希望することがあれば自由に書いてください」というフリーアンサーの回答の中には、大学の授業への不満や注文をあげるものが多い。以下代表的意見を整理して掲げておく。

「大学の先生について感じること、希望すること」（19大学自由回答、抜粋）

A（授業への不満・希望）；・だらだらとした授業が多い ・授業がつまらない ・為になる授業がない ・眠くなる授業ばかりだ ・出席していても意味のない授業が多い ・高い月謝を払っているのに家で自分で本を買って読んだほうがましな授業がある ・おもしろい授業をしてほしい ・おもしろくて飽きない講義をしてほしい ・生徒に興味を抱かせるような授業をしてほしい ・もっと自分の体験を交え生徒の興味をひくような話をしてほしい ・もっと人を魅きつけるような講義をしてほしい ・知的関心を刺激するような話をしてほしい

B（教員のやる気）；・やる気のない先生が多い ・教える気がなさそうに感じる ・情熱をまったく感じられない先生がいる ・熱意のある授業をしてほしい ・もっとやる気をもって講義して

ほしい ・授業をもっと大切にしていきたい ・先生達に向上心がない。熱意が感じられない
・もっとちゃんとした授業をやってほしい ・給料分くらい働いてほしい

C (授業方法の改善)； ・はっきり話してほしい ・先生の教え方が下手 ・講義のやり方が下手、教科書の選び方が悪い ・もそもそ話をし一人で授業する人がいる ・本を読むだけ黒板に字を書いていくだけの講義はやめてほしい ・わかりやすく興味をひく工夫をしてほしい ・もう少しテンポよく面白く眠さを忘れさせてくれるような授業をしてほしい ・自分の授業の悪いところを知って改善してほしい ・教える技術を身につけてほしい ・授業方法について研究すべき

D (広い視野の講義, 役立つ講義, 時代に対応した授業, 学生参加の授業を)； ・自分の研究分野についてだけしゃべっている先生がいる ・自分の世界に入らずに生徒に理解出来るような授業をしてほしい ・自分の枠に閉じこもってその考えを強制する先生がいる ・自分の専門だけを話すのはやめてほしい ・昔の考えにこだわっている先生が多すぎる ・考え方が古い ・一体あんたは何年前のノートを使っているの？ ・理論が多く実践的な話が少なく ・難しい理論の話も日常生活と結びつけてわかりやすく説明してほしい ・時代に対応した講義を行ってほしい ・新しい感覚をもっと取り入れてほしい ・現実の社会と結びつき解決の展望を示す学問を教える努力をしてほしい ・もっと役に立つ授業をすべきだ ・世の中で役立つことを扱ってほしい ・もう少し実用的な科目を ・ワープロやパソコンなど将来に役立つことを教える授業をしてほしい。 ・もっと生徒に考えさせるような授業をすべきだ。 ・体験型の授業を多くしてほしい 生徒に語りかけるような授業をしてほしい ・もっと生徒に関心を持ってほしい ・一緒に学ぶという形式がほしい ・ゼミを多くして ・少人数教育ができるようにしてほしい ・コミュニケーションのある授業を ・のびのびした授業, 幅広い知識の授業を受けたい

E (その他)； ・先生がすばらしい ・教授は変り者の集まり ・熱心な先生もいればつまらないことばかり話す先生もいる ・いい先生もいればいやな先生もいる ・先生によって格差がありすぎる ・セクハラをしてる先生がいる。最低 ・魅力のある人がいない ・先生はみんなあほ！ ・自分の本を数冊売るのはやめてほしい ・大学は老人ホームではないので80歳を越えたら引退してほしい ・もっときちんと出席を取ってほしい ・出席が厳しすぎる ・自分の好きなことを勉強させてほしい ・学生はもっと勉強すべきだ ・学生の意識が低すぎる

以上のように今の学生は大学の授業や教員の教える姿勢についてさまざまな不満をもっている。それを表明する機会を与えられないまま、授業をエスケープしたり、私語をしたりすることも多い。したがって、アメリカの大学のように学生の授業評価によって、大学の授業を評価し改善していくことが必要であろう (武内 1996)。

本稿は15大学・4短大の大学生調査の結果から、学生文化の規定要因について検証した。学生文化を規定する要因として、学生のハビタス、大学チャーター、大学の組織的特質の3つを取り上げた。その結果、1、学生たちは親のハビタスを背負って入る大学や短大を選び入学し、大学生生活を送っている。2、親の学歴 (= 子のハビタス) の違いは大学における学生文化の違いを直接生み出すのではなく、大学文化を経由して働いている。3、大学教員が授業を重視し熱心に教えることは、

学生たちの大学生活に影響を与えている。つまり大学内部の組織的努力は学生文化の変容をもたらす。学生文化をめぐるさらに複雑な規定関係の分析は別稿に譲る。大学改革を実りあるものにするために学生文化の研究がさらに必要である。

【注】

- 1) 本研究は、科学研究費一般（C）（平成8～10年度）によっている。以下のメンバーの共同研究である。武内清（上智大学）、大野道夫（大正大学）、岩田弘三（武蔵野女子大学）、渡部真（横浜国立大学）、吉川杉生（中部女子短期大学）、白石義郎（久留米大学）、金子聡（上智大学大学院）、黒河内利臣（同）、鳥雄利（同）、浜島幸司（同）
- 2) 今回のサンプルは、日本の大学・短大の構成を正確に反映していない。専攻学部も理工系学部の学生に調査をしていない。全体的傾向（単純集計）ではなく、内部の関連メカニズムの解明をめざしている。
- 3) 天野（1997）は、『大学に教育革命を』というタイトルの本の中で、日本の大学教員が研究を重視していた時代から教育重視の時代へ移りつつあることを指摘している。そして教育重視の必要が生じたのは、大学進学率上昇や入試方法の多様化に伴う学生の質の変化や学力の低下のためとしている。しかし同時に、現代の大学における教育の重視は、学力の高い学生のために一層求められている。情報の少ない時代においては必読文献も決まっていたが、現代は溢れる情報の中で何を取り入れるべきかが混沌としている。情報への導き手として大学の授業や教員の役割が昔以上に必要な時代になっている。そのような中で、大学の授業の重要さも増している。
- 4) しかし、学生たちが大学の授業への不満や要望が強いからといって、大学が教育重視によって学生への統制を強め、大学の「学校化」を図ればよいということを意味するわけではない。学生たちもそれを望んではいない。学生たちは、「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心にした生活を送るべき」場とは考えていない（39.2%）。むしろ「大学は学問よりサークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場である」（58.6%）と考えている。また「学生の生活や学習について学生の自主性にまかせたほうがよい」（92.3%）、「出席が少なくても試験やレポートがよければ良い成績を与えるべきだ」（60.9%）と考えている。学生の大学に対する要望の基本は、高校までの教育にはない自由や自主性の尊重だからである。高校までにはなかった自由によって、学生たちは大きく成長していく。また大学満足度の総合評価である「今の大学に入ったことへの満足度」とこれまでみてきた「先生の授業熱心」との相関は0.22とそれほど高いわけではない。それより、「今の大学に入ったことへの満足度」と相関の高いのは、順に「今の学科に入ったこと」（相関係数；0.70）「大学全体の雰囲気」（0.58）、「授業全般に満足」（0.44）、「おもしろい授業がある」（0.36）、「大学周辺の環境」（0.35）、「幅広い知識が得られる」（0.34）、「サークルの人間関係」（0.31）、「専門的知識が得られる」（0.30）、「図書館に満足」（0.26）、「学科の人間関係」（0.26）、「先生との関係」（0.25）、「購買部に満足」

(0.23) である。このことは、大学生の生活が授業だけでなく広い範囲に渡っている、また学生たちの自主的に選択できる範囲や能力があることを示すものであろう。

【引用文献】

天野郁夫 1997『大学に教育革命を』有信堂

Astin, A.W. 1985, *Achieving Educational Excellence*, Jossey-Bass

Fiske, J. 1989, *Reading the Popular*, Unwin Hyman, 山本雄二訳 1998『抵抗の快楽』世界思想社

丸山文裕 1981「大学生の就職企業選択に関する一考察」『教育社会学研究』36集, 東洋館出版社

Meyer, J.W. 1972, *The Effects of the Institutionalization of Colleges in Society*, College & Student, Pergamon Press Ins.

竹内 洋 1990「キャンパスの“金魂巻”」『大学進学研究』70号

竹内 洋 1995「学校効果というトートロジー」『教育現象の社会学』世界思想社

武内 清 1985「現代大学生の受講態度とその関連要因の研究」武蔵大学人文学部社会学科

武内 清 1988「現代学生の勉学と余暇」『青少年問題』35巻4号

武内 清 1994「日本の青年」『児童心理学の進歩』, Vol 33. 1994. 金子書房

武内 清 1996「アメリカの教育事情—Madison (W.I.) での見聞, 体験を中心に」『上智大学教育学論集』30号

武内 清・深谷野亜 1997「親の大学経験と親の教育力との関連」『上智大学教育学論集』31号

Positive Study of Factors Defining Student Culture

—Based on a Survey Conducted in
15 Universities & 4 Junior Colleges—

Kiyoshi TAKEUCHI*

This paper attempts to clarify how certain factors define student culture. The analysis begins with data from 2,130 students (619 Males 1,511 Females) from 15 universities or colleges and 4 junior colleges, in which surveys were carried out between November and December of 1997. Three factors are taken to define student culture at each university: student 'habitus', the college charter and the faculty's enthusiasm toward classes.

Each student has his or her own habitus when entering university and we find differences according to the different universities. Habitus is a mode of action formed through the long period of family life and school life. A difference in habitus can be seen in that many of the parents of university students are university graduates or graduates of junior colleges, while relatively many of the parents of junior college students are high school or junior high school graduates. Children whose habitus is middle class with highly educated mothers are in general motivated students at university, while children whose habitus is working class with less educated mothers devote more time to their part time jobs. Thus, students take on their parents' habitus when they choose their university or junior college and in the way they pass their time at university.

Next we examined the triple cross tabulation among three factors; parents' academic background, the college charter and student life. Here we used as the index for the college charter whether it was a four year university or a junior college. No matter what academic background the parents have, in comparison with junior college students, university students show more enthusiasm for study and club activities. In regards to levels of social awareness also the difference between university and junior college is greater than that of parents' academic background. In short, the differences in parents' academic background do not cause differences directly in student culture in Japan, but have influence on them by way of the respective university.

In order to see the influence on student culture of the internal organizational characteristics of university, we investigated the influence on the student's college life of teachers' enthusiasm

* Professor, Faculty of Humanities, Sophia University

for teaching and their regard for the importance of classes. There is a great difference in the enthusiasm of teachers among different universities. The differences are according to whether it is a university or a junior college, the size of the college, the academic level and whether it is a women's college or a co-educational institution. This "enthusiasm for classes of the teachers" is connected to the students level of satisfaction with classes and college life. If teachers are enthusiastic, students are more satisfied with their classes, relationships within the classes are better, and there is a high level of satisfaction with university as a whole. Their life also becomes centered on study, they become involved in university clubs, and they enjoy their university life.

It is important to take student culture into consideration in the process of university and curriculum reform. This paper argues for the necessity of further research into student culture in this connection.